研 究 者：毛利　有紀（所属：東京医科歯科大学歯学部歯学科３年）

研究題目：タイ歯科研修プログラム

目　的：

・シーナカリンウィロト大学での様々な活動を通して、日本との違いを知り、国際理解を高め、将来グローバルな視点をもって 診療・研究ができる歯科医師を目指す。
・大学の関連施設の見学を通じて、タイにおける歯科医療制度・歯科保健状況を知り、理解する。
・同大学の歯学生教育施設を見学し、タイの歯科教育を知り、日本との違いを理解する。
・同大学の学部生・大学院生・教員との交流を通して、英語のコミュニケーシ能力を向上させる。
・タイの文化・歴史・慣習・言語などを、理解し異文化理解を深める。

対象および方法：

対象：歯学科３年生２名、歯学科２年生２名
期間：20 18 年８月 22 日～８月 31 日
場所：タイ（バンコク）、シーナカリンウィロート大学歯学部・歯学部附属病院または、その大学関連施設

活動内容：

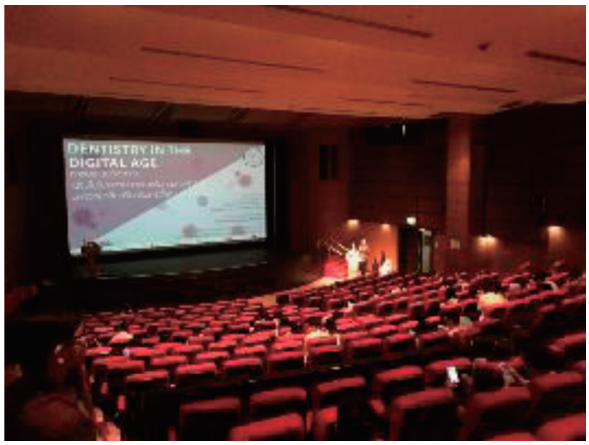
1. 歯学部棟の見学

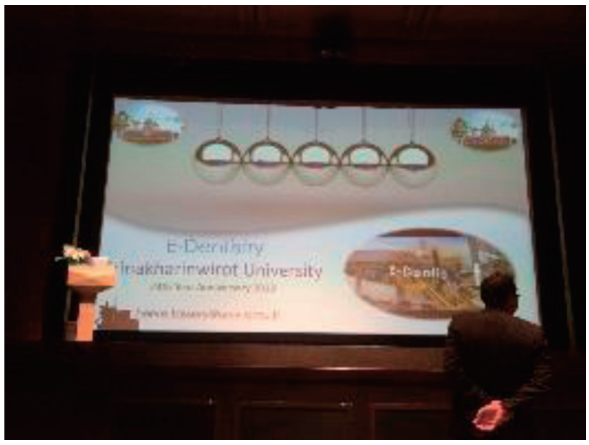
タイに到着した初日、私たちは、シーナカリンウィロート大学バンコクキャンパスの中にある歯学科棟を訪れた。

１つの建物の中に学生による診療が行われる病院と実習室があり、病院は補綴・矯正・口腔外科など複数の科ごとに分けられていた。4 年生の第 2 セメスターから 5 年生までは各科を回って基本的な治療を実際の患者さんに行いつつ習得していく。

またキャンパス内では、左の写真のような大学の制服を着た学生が多く見られ、日本とタイの大学生の雰囲気の違いを感じた。

2. 歯学部創立記念セレモニーに参加





歯学部創立24周年記念日に行われたセレモニーに参加することができた。デジタル技術と歯科をテーマにプレゼンが行われ、招かれた外部からの講師がプレゼンを行った。E-Dentistry のテーマのもとデジタル技術がタイでどのように応用されつつあるのかを理解した。また式の後にはレセプションパーティーが開かれ、タイの日常食を楽しむことができた。

3. 矯正科を見学

矯正科を見学しながら材料・手法について学んだ。また、説明後に実際に使われている針金を折り曲げて椅子の形を作るという実習を行った。私たちはまだ矯正の実習を行ったことがなかったので、なかなか針金の扱いになれず苦戦したが非常に良い体験となった。

4. 総合診療科を見学

この歯学部に来院した患者さん全員が必ず最初に訪れる総合診療科で、どのような手順で治療を受けるのかについてお話を伺った。患者さんは、まず患者登録を行って検診を受ける。カルテは紙製で、日本とは異なり顔写真が貼付されている。検診では基本的に歯のイラストに色付けを行って歯式を記録していた。総合診療科での検診も学生が行っているので、このような形式を用

いることで見落としや勘違いしているところを講師に指摘してもらうことができる上、それによって自分の持っている知識と実際に見える口腔所見を一致させる訓練になるのではないかと感じた。医科歯科大学では、学生が総合診療科で検診し患者さんを各科に割り振ることはしないので、教育制度の違いについても学ぶことができた。

5. 英語クラスでプレゼン

英語のクラスに参加し、“Studying Dentistry”のテーマのもと、私たちとタイの学生が双方にプレゼンを行った。それぞれの大学では歯科医になるためにどんな教育がなされているのかだけでなく勉強以外の学生生活についての話も聞くことができた。学習内容に共通する部分もあったが履修時期が私たちよりも早いそうで、サークル・部活動がなく、放課後は技工や研究に励むなど異なる部分の方が多いと感じた。また、学生との交流で印象的であったのは学生の英会話能力が総じて高かったことである。彼らは英語を学ぶのではなく、英語で学んでいる。ある歯科専門用語を表すタイ語がないこともあるそうで、患者さんに説明するのが難しいと学生の一人が教えてくれた。

6. 歯学科２年のカービングのクラスの見学と体験

歯学科２年のカービングの実習に参加した。医科歯科大学では３年前期に実習を行うので、２年生の２名にとっては初めてのカービングであった。また、３年生にとっても原寸大でカービングを行うのは初めての経験であった。学生に教えてもらいつつ、集中して実習に取り組んだ。

7. タイでの歯科教育や保健制度について学ぶ

タイの歯科大学やそこで行われている教育、保健制度や歯科状況について伺った。ここで聞いた話を通じて、タイの歯科大学のカリキュラムは歯科状況や社会を反映したものだと学んだ。例えば、歯学生は卒後３ 年間地方の歯科医院で働かなければならないそうだ。これは、都心と地方で歯科状況に大きな格差があることによる制度だと現地の先生は仰っていた。先述の通り、タ

イでは患者さんに対して治療を行う期間が日本に比べて長い。日本では、どちらかというと卒後に基本的な技術を習得していく印象がある。タイでは、卒業する時には自立して歯科医療を提供する必要があるからこそ、このようなカリキュラムが組まれているのではないかと考えた。

8. タイの伝統的楽器とダンスを体験

2日間に渡り、伝統的な楽器とダンスを体験することができて新鮮であった。楽器の演奏は芸術学部の学生から、ダンスは今回のプログラム中ずっとお世話をしてくださった歯学部の先生方から教わった。ダンスはタイに住む人なら誰もが踊れると聞き、タイの伝統文化の継承に対する意識の高さに触れることができた。

9. “Teachers’ Day” のセレモニーに参加

この学校で毎年行われている、生徒が日頃お世話になっている先生方に感謝の気持ちを込めて行われる Teachers’ Day に参加した。教員と学生との交流の場があり距離が近く、私が日本で経験してきた高校までの学生生活に戻ったような感覚で、異国の地にいながらどこか懐かしさを感じた。

感　想：

今回のタイでの研修は10日間と短いものであったが、日本とタイ、それぞれの歯科に関する事情に関して深く知り、考える機会となった。また、なぜその違いが生じるのかを考えることによって国ごとの社会背景や経済事情、文化などの様々な要素が歯科医療に大きな影響を与えていることを実感した。他の国の歯科事情についても現地を訪れ、理解を深めたいという気持ちが高まった。

将来歯科医師として働く上でも有益な体験となったことは言うまでもないが、それ以前にこの研修を通して得られ、高まったそれぞれの国の様々なバックグラウンドを考慮した異文化への理解力は、国際化がますます進む現代の中で非常に重要であると感じた。

成果発表：

来年4月ごろ、歯学科学生を対象にタイでの歯科研修について発表を行う予定である。